

■ 月日は

| | |
|---|--|
| <p>(原文)</p> | <p>(現代語訳)</p> |
| <p>つきひはくたいの過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の</p> | <p>月日は永遠の旅人のようなものであって、来ては去り、去っては来る年もまた旅人である。(船頭として)舟の上で働いて一生を送り、</p> |
| <p>口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。</p> | <p>(馬方として)馬のくつわを引いて年をとっていく人々は、毎日が旅であり、旅を住まいとしている。昔の人の中にも多く、旅の途中で亡くなった人がいる。</p> |
| <p>予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年</p> | <p>私もいつ頃からか、ちぎれ雲が風に誘われていくように、さすらいの思いがやまず、(近年は)海辺の道をさまよい歩き、去年</p> |
| <p>の秋、江上の破屋にくもの古巢を払ひて、やや年も暮れ、春立てるかすみの空に、白河</p> | <p>の秋、(隅田)川のほとりの粗末な家屋に(帰って、)留守中についたくもの巢を払って、やがて年も暮れ、春がすみの立ちこめる空のもとで、白河</p> |
| <p>の関越えむと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手に</p> | <p>の関を越えたいと、そぞろ神がとりついて心をそわそわさせ、道祖神が手招きをしているような気がして、取るものも手に</p> |
| <p>つかず。もも引きの破れをつづり、笠の緒付</p> | <p>もも引きの破れを繕い、笠のひもを付け</p> |
| <p>け替へて、三里に灸据ゆるより、松島の月ま</p> | <p>替えて、三里に灸を据えて(旅支度をして)いると、松島の月は</p> |
| <p>づ心にかかりて、住めるかたは人に譲りて、杉風が別荘に移るに、</p> | <p>どんなだろうかとまず気にかかって、今まで住んでいた家は人譲り、杉風の別荘に移るにあたって、</p> |
| <p>草の戸も住み替はる代ぞひなの家</p> | <p>草の戸も住み替はる代ぞひなの家</p> |
| <p>面八句を庵の柱に懸け置く。</p> | <p>(この句を発句とした)面八句を(記念として)庵の柱にかけておいた。</p> |

・ p.118～119までの現代語訳を全て写すこと！
 ・ 原文の下に現代語訳を書くこと！(多少原文と現代語訳がずれても可)